

---

# ユー・エフ・オー UFO

川犬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ユー・エフ・オー UFO

### 【Zコード】

Z4397G

### 【作者名】

川犬

### 【あらすじ】

山名岳は、バイトの帰りに何かが飛んでいるのが見えた。それは、どこからどうみてもUFOそのものだった。そして岳はそのUFOらしきものにひかりをあてられた。その途端に体がふわりと起きそのUFOに吸い込まれていった。

## プロローグ

目を開けた。身体を横にそらそらとある。

しかし身体が動かない。汗が手からじんわりと出していく。

「……ここのまじこだ？」

岳はもがいた。しかしまつたく動けない。

なぜうじけないか。すぐにわかった。

目を開けたその時からわかつていた。

「なんだよこれ……。」

手や足や腹がくさりで縛られている。

そつと周つを見渡す。どうやら飛んでこないみたいだ。

窓のよつなとこから空が見える。暗い夜空だ。

壁を見る。白い。それは、触つてみると吸い込まれそつなくつて白かつた。

目を再びつむった。岳は想い返した。

すべてはあの時からおかしかったのだ。

岳は夕方、コンビニのアル

バイトをしていた。

昼からずっととしているので疲れがたまっている。

また客が来た。帽子をかぶっているので顔が見えない。

「いらっしゃいませ」

岳は元気よく言った。

しかしその客はクスクス笑っている。

「ひさしぶり！ 岳」

かぶっていた帽子をその客がとると、懐かしい人物が顔をだした。特徴のある肌の黒さ、そして何より髪型が少しおかしい。昔よりおかしさが増している。

「て、寺木」

そう、この人の名前は寺木学といつ。

「そうだ！」

「…。

少しの沈黙の後、岳はその沈黙を破った。

「で？ 客としてきたのか？」

「悪い？」

「…別に。」

岳は少し最悪な気分でいた。

学はあまり好きではないからだ。

何と言つたらいいかわからないが、とにかく学はMなのだ。そこのこところがあまり気に食わない。

早く帰れ 早く帰れ と心の中でつぶやいた。

その願いは届くはずもなく学はニヤニヤしながら、いろいろ見まわっていた。

相手は客としてきてるのでぶつとばせない。

「へへがんばってんじやん」

「ううこいこいやべり方も好きでせなー。

岳は少し低い声で言つた。

「早くしろよ」

「そんなこと言つてだー。俺様は密だぞ 密だぞーー

「わかつてゐよ」

「じやあやんなこと言つちやけなこよなー」

「・・・はこねこ

ほんとうに面倒くさい。つたぐどうだつてんだ!

しばりくじてよつやく学はレジにやつてわだ。

「これよひしーー

学はしそうゆ味の焼きおにぎりとハムのサンデイッシュとコカ・コーラをレジにだした。

ピッ

ピッ

ピッ

「520円になつます。」

学はまだ二ヤ二ヤしてこる。

昔からそつだ。みんなはこの顔がつらからしくてよくいじめてたものだ。

しかし学はやはつてなので抵抗しない。

仮にしたとしてもよわよわしいものだつた。

学はポケットから財布をとりだし、わざわざから600円を取り出した。

「はいよー

学から600円を受け取つたが、学は手からそれを離さない。

「とつてみやがれーー」

・・・。なんだか本氣で学を殺したくなつてきた。

しかしそんなことをしたらあたりまえだが警察行きだ。あんなところへは行きたくない。

いつたら戻ってきたときにもわりからへんな田で見られるからだ。

学からなんとか600田をうばつた。

そして岳はおつつの80田を取り出し渡した。

「おやじわーー」

本当の本当の本当にぶつ飛ばしたい。

岳は手に力をおもじつきりいれた。もし爪が長かったら血が出ていただろう。

それぐらい力を入れた。が、おさえた。

おさえろ おさえろ、と心の中で囁えるよつこいつた。

「よおー しじやあまたなー」

学は出て行った。

岳は椅子に座りこみため息をついた。

どうしてああこいつわざつたらしにやつがいるんだ。

あんなやつをえてしまえばいいのに。

そう思い、再びため息をついた。

しばらくして、岳はある決心をついた。

そして、その決心を実現させるために店長のこる部屋までいった。

ドアまできた。その向こうには明らかに店長がいる。

しかし外人らしき人の声も聞こえてきた。

岳はそつと壁に耳をあて盗み聞きをした。

「 デス。 デスヨネ」

外人らしき人の声は、なんだかぎこちなかつた。

「ええそうです。今夜ですね。楽しみです。サンプルが手に入りますからね、Mr. ホリュヤー」

どうやら外人の名はホリュヤーといふらしい。

「オウ、ソノトウリデース。」

「ではさようなら。」

「 See you」

岳はあわてて物陰に隠れた。

外人が出ていく。1人だと思ってたが2人だった。

1人は白人でもう一人は黒人だった。

おそらく、黒人はガードマンだろう。

とすると、なにか重要ななかがあるに違いない。

岳は少しだけきょううみをもつた。昔からこうこうのものを調べるのは得意だ。

しかし今は店長にようがあつた。そのあとにそのことについて調べてみよう。

ドアの前に立ちノックした。

コン コン

「 ビーぞ」

中から店長の声がした。

岳はドアを開けると店長はすぐ近くにいた。

「なんだい？」

岳はおそるおそる口を開いた。

「あ、あの・・・少し言ござらこのですが・・・  
「ん? いいよ。いつでござる?」

「Jのバイトを今すぐやめてもいいですか?」

「え...」

店長は少し驚いた表情をした。

計算が狂う そんな感じがした。

だがすぐに元の表情にもどりこつこつた。

「あ、ああ。いいけど少なくとも今田じゅうはやつてくれないかな。じゃないとこまるんだけど」

「はいわかりました」

「よしわかった。じゃあ残りの時間がんばれよ。」

「はい。ではしつれいしました。」

岳はドアを開け、でていった。

「ふう・・・これでよしつと」

そつである。決心とはこのバイトをやめてひまつぶしならにすることである。

そつあすこして店長のよしつがおかしかったが岳はあまり氣にしなかつた。

そしていつの間にかわざきの外人のことを忘れていた。  
それと次のバイト先はもう考えてある。

次のバイト先はマクドナルドの店員にしよう。  
CMでもよくやっている有名なハンバーガー店だ。  
面接なども自分の得意分野だ。楽勝すぎる。

「よおーし、よるまでがんばるぞ!」

そつこのバイトは午後1時から午後7時までである。  
今は5時半。あと一時間半ほどすればもうおしまいだ。  
岳は精一杯働いた。

するとあつといつ間に時間が過ぎた。

岳はすぐに私服に着替え、コンビニの外へ出た。

「飯だ 飯だ！」

岳はいつもかよつているレストランにいつた。

こここのレストランは特別だ。なぜなら安いのにおいしいからだ。しかも隠れたところ、いや人が少ないところにあるので客が少ない。なので、すぐに中に入り、カウンターのいすに腰掛けられた。岳はメニューーブックをとり、ペラペラとページをめくつた。

そして注文する物が決まり、店員を呼んだ。

「ご注文はお決まりましたか？」

「はい、えーとじゅあハンバーグ定食で」

「以上ですか？」

「はい」

「それではしばらくお待ちください。」

岳はとたんに暇になつた。

このレストランにはひとつだけ欠点がある。それは時間がかかることがある。

まあおいしく作るために時間をかけていると思うのだが。それは時間がかかることがある。

30～40分は暇になるだろう。

その間岳はケータイを取り出しゲームで遊びだした。

今ハマつているケータイゲームは（モンスターハンター）である。ケータイ版なので多少 プレイステーションポータブル PSP や PSP2（プレイステーション2）より画質は落ちるがそれでもこの時間の暇つぶしになつた。

岳はゲームに熱中しているといつの間にか時間が20分過ぎていた。

「お客様、お待たせいたしました。ハンバーグ定食です。」

その声で岳は料理が来たのに気づきケータイを閉じ、しまつた。

そして肉をかぶりつきその後、飯を頬張る。

あつという間に平らげた。やはり、おいしい。

岳はレジで会計を済ませ外にでた。

「あー あもう8時か ・・」

岳は家に帰ることにした。

正確にいうと7時57分なのだがあそこのうちは誰もいないのでどうでもいい。

夜道をとほとほと歩いていた。すると真一にハレの運転感を感じた。街灯の明かりはあるのだが、月や星の光が感じていかない気がするのだ。

そんな気がした。

直をすます。すなむかすかに飛んでしむが闇にえできた

西漢書卷之三

心臓の鼓動が早まっていく

卷之三

9

UFOの下の部分が開き光が発射された。

それが岳にあたる。

すると岳の身体がふわりとかつてに確実に浮かび上がってきた。

「これじゃあまるで映画のなかじゃあないか！！

「たすけてくれ～～！！！！！」

そして岳はUFOに吸い込まれていった。

あまりの暑さに岳は田を開ました。

うつすらと田を開ける。

「ハ、ここは？」

たしかにFOTOにさりわれたはずだ。

しかしこの風景はおかしい。ここは確実にFOTOの中ではない。かといって日本ではなさそうだ。

見渡す限りここはインドあたりのような気がする。

そういうえばさつきから右腕が少し痛む。

「なにこれ？」

見てみると黒い点が十字架になるように浮き出ているのだ。いつの間に浮き出ってきたのだろうか。

「おひょづす！じゃまだよー！」

気がつくとバイクに乗ったインド系の男の人が自分にむかって叫んでいた。

岳は横へ移動する。

インド系の男の人はこっちを睨みながらどこかへ行ってしまった。

ここはどうやら商店街のようだ。

だが岳はなにかおかしいと思つていた。

なんだ？この違和感・・・

なにかがおかしい。やはりどこかがちがう・・・

岳は最初から思ひ返しなおした。

俺は夜8時ぐらいにFOTOにさりわれた。

そして気がつくとこのインドらしきところへきていた。

気を失つているときに連れて行かれたのだろうか？しかしそれはどうでもいい。

その後、俺は右腕に十字架になるように浮き出ている黒い点を見つけた。

それを思い出した岳は十手架にならひて浮き玉に黒こぶを升  
でこすつたりしてみた。

しかし落ちない。

「これはいつたいなんなんだ？」

なんど懸命に消そうとしても、いつに消える氣配すらない。  
岳はしかたがなくそのあとのことにも思ひ返してみた。  
たしかあのあとインド系の男の人に文句を言われた。  
いやそればれた。

（おこぼりすーじゃまだよーー）

？

岳はこつしょん理解するのに苦労した。  
もつ一度思ひ返してみる。

インド系の男の人に文句を呼ばれた。

（おこぼりすーじゃまだよーー）

（おこぼりすーじゃまだよーー）

（おこぼりすーじゃまだよーー）

わけがわからない。  
岳はじょじょに混乱してきた。

また、出でまわる一つのある「ルート」がついた。

それは、他の人を見れば容易にわかつてしまつた。

それは、全員に共通するものだつた。

誰一人としてここにいる人たちでそれがない人はいなかつた。

なんと皆自分と同じ十字架のあの模様が浮き出でているのだ。  
岳は恐怖にとりつかれた。

לְפָנָי. וְהַנִּזְעָם. לְפָנָי. וְהַזְעָם.

そして、

みんなの視線がこちらに降り注いできた。

目を一むいてもわかる

その目は・・・鋭く殺意に満ちていた。

まるで岳が獲物かのように視線は一点に集まっていた。

不気味に笑っている

一九四八年九月二十一日

卷之三

いやつながつていいのだろ？

岳の恐怖はもう限界値に到達しかけていた。

「助けて

たすけて！

TASUKE TE---

タスケテ――――――――――――――――――――――――

も「岳はあまりの恐怖で全身が震えだしている。

「うわ～～～ ああああああ――――――

にげたかつた。

もうここにいたら確実にこいつらに殺される――  
しかし足が動かない。逆に座り込んでしまった。

焦りで汗を大量に出し、喉は完全に乾ききっていた。  
眼は充血している。頭はきんきんにいたい。

このもうすぐ殺されるという恐怖が岳をじにじにしたのである。

「アハアハアアハハハハハハツ――！」

そいつらは狂っていた。

いや狂っているところの語は適当ではない。

そいつらは

壊れているのだ。

それ以前にそいつらはいつたい何者なのかもわかつていない。  
じょじょに歩み寄つてくる。

囮まれてしまつていてのでもう逃げられない。

手遅れだつた。

そして、岳は死すら覚悟していた。

「もうおわりだ・・・」

目を閉じる。

すると自然に今までの楽しかつたことや悲しかつたこと、うれしかつたことやつらいことなどが浮かんできた。

ああ・・・こままでいろいろあつたナ・・・

まだ父さんや母さんにすらよならといつていな。

せめてでも最後にみんなによならだけはいいたかつた。

岳は心のなかでそつとつぶやいた。

さよなら 、と。

再び目を開けた。

視界にはやつらがいた。

岳の覚悟は確かなものになつていつた。

一滴の涙がこぼれおちた。それは乾ききつた土、いや砂におちた。

いつの間にかインド系の人たちだつたひとは徐々に異変を起こし始めた。

「腐つていいてやがる！」

なんと腐り始めたのだ。

それでも歩み寄つてくる。

それはとても気持ちの悪いものだつた。

グロテスク。

一言で言えばそうだらう。

内臓が見えるものもいれば目が腐つて地面に落ちたやつもいる。

それでも歩み寄つてくる！

しまいには骨が見え出してきた。

まだ肉のついた生々しい骨が。

岳は動けない。

とうとう1人が崩れ落ちた。

周りのやつらも崩れ落ちる。

そして、全員が崩れ落ちた。

骨は瞬く間に砂と同化して消えた。

「うわー！」

岳は飛び起きた。

まだ状況はつかめない。

あれ？ どうなつてやがる・・・

岳は一人で語つた。

「夢？」

背中の汗は気持ち悪いぐらいにかいていた。服とべつたりくつついていてぬめぬめする。

「た、助かった・・・」

未だに心臓の鼓動がドクドクいつている。  
しかし本当に夢なのか。

夢なのに鮮明に覚えていた。

周りを見渡す。

病室？

どうやらあの夜に何があつたらしい。

記憶に従えばJFOにさらわれたはずなのだが。  
頭には包帯が巻かれていた。

「いつたい何があつたんだ・・・」

そのとき扉が開いた。

そして看護婦が駆けつけてきた。

「どうしましたか？」

どうやらさつき起きたときによほど大きく叫んでしまつたらしい。  
近くにいたようだ。

「い、いえべつに大丈夫です」

「よかつた。山名さんがいきなり驚いたように呼ばれた声を聞いた  
のでびっくりしましたよ。」

「すみません。少し悪い夢を見ていきましたから」

「そうですか。でももう大丈夫ですよ。安心してください。」JFOは  
病院です。

「はい。」

岳は安堵の息を洩らした。

しかし本当の恐怖はこれから始まるのであつた。

時間が過ぎた。

岳は寝てしまつたらしくはつとなつて田を覚ました。

質問をとりあえずしてみた。

ついでにもう起きたと知らせるためにもだ。

「僕はどうしてこんな怪我をしているんですか？」

「・・・」

看護婦は後ろを向いたまま答えない。

「どうしたんですか?」

「・・・」

明らかに看護婦の様子がおかしい。

岳の声に反応しないどころか身動きひとつしないのだ。

「あのー」

「・・・」

つこわづきまで普通に会話していたのが不思議に思つづらに看護婦は無言だ。

岳はベッドから体を起こした。

「どうしたんですか?」

「・・・」

岳は近づく。

「聞こえます?」

「・・・・・・」

そして岳はついに看護婦の顔を覗き込んだ。

それは、生物ではなかつた。

少なくとも絶対に。

「マネキン・・・

一体どうなつてしまつて いるの だろ うか。

さつきまでふつうに 話して いたの に…

いつの間にマネキンにすり替わつたの だろ うか。

もしすり替わつていなかつたと したら さつきの会話は いっ たい。

「そ ういえ ば 他 の 人 は ？」

誰もい ない は ず が な い。

岳は勢いよく病室を飛び出した。

走つた。走りまくつた。

「だれか～だれかいませんかあ～～！～！」

もう悲鳴にちかい声だつた。

こんな声を出したのは初めてだ。

自分でも驚いて いる。

のどの調子がおかしい。

いや身体がおかしくなつて いる。

まるでだれかにエネルギーを吸い取られ て いるよ うな そ んな 気 が し  
て たまらなかつた。

それとさつきから誰にも会つて い ない。

会うのは医者のマネキンや病人のマネキンだ。

手術室へむかつて みる。そ が ま だ さ が し て い な い 唯 一 の 場 所 だ つ  
た。

そ が い な い と す る と こ の 病 院 に は 誰 も い な い こ と に な る。

さつきの看護婦はなぜマネキンになつて い た の だろ う か。

謎は深まる。

しかし岳は恐怖を感じなかつた。

いや感じられなかつた。

感じることができないのだ。何もないのだから。

岳は手術室の扉のドアノブに手をかける。

これが最後の希望だつた。

もつこにいなかつたら俺はどつすればいいんだ！

そして扉をそつと開ける。

せめて・・・せめて大手術をしていて医師や看護婦が全員手術室にいました、というおちにしてほしい。

していなかつたら、希望が終わる。

中が見えた。

しかし、

だれもいない・・・

よく細かいところまで探した。

必死で探した。

「だれかいてくれよお」

応答なし。

そのときばたりと倒れた。

そして右腕がずきずき痛みだした。

「まさか・・・」

ふくの袖をまくつあげた。

そこには・・・・・・・・・あの夢の中のときこあつたものと同じ十字架になるように浮き出でている黒い点がそこにはあつてしまつた・・・

いたみはじょじょに強くなつていぐ。

「ヴああ・・ああ・・・・

痛い。異常にくらいに痛む。

そして体が動かない。

足から感覚がなくなつてきた。

足を見てみる。

この輝き・・・

それはマネキンそのものだつた。

この時になつて岳はやつと気づいた。

みんないつやつてマネキンにされたのだらう。

だから誰もいなかつた。はじめはいたのだ。

自分はマネキンにされていく。

そのとき田の前のパソコンが勝手に起動した。

そこに映し出されたのはあの十字架になるように浮き出でる黒い

点だつた。

モニタールームにいるある男がいた。

モニターに映し出されているものを見ている。

ふふふ・・・計画どおりだ

「今度一死・・・・今度二

そして笑ってました

「わあっ！！！」

岳は飛び起きた。

レバノンの内戦は、1975年4月から1990年5月まで続いた。

心のままに夢を語る。

身体が軽い。

岳はほんとなつて右腕を見た。

「」んどこそ助かつたのか?」

そうつぶやいた。

周りを見渡してゐる

その時木の笛がひびき聞えた。

「此れがこのれなれ——」

母の声だつた

〔 〕

卷之二

いつもと全く変わらなかつた。

時代以外。

「今日から学校でしょ？」

は？何言つてゐんだ。

「もう中学2年生なんだから自分で起きなさ」

？？？

ますますわけがわからなくなつた。

「中学2年生？」

そういながり階段から降りた。

「なに寝ぼけてこるので、あたりまえじゃない

「えつ？」

「まひほひはやく朝食食べなさい」

「は、はー・・・

まつたく分からなかつた。

とりあえず岳は朝食を済ませた。

「ねえ母さん

「なに？」

母は洗濯物を干しながら言つた。

「いやなんでもない

言えなかつた。言つたらまた夢みたいことになつたからだ。  
もうさんざんだつた。

たとえ夢でもだ。

あんな恐怖2度と味わいたくなんてなかつた。

岳は中学校に行く準備をしていた。

10年前がよみがえつてくる。

「これも夢なのか？」

つい疑問に思つてゐることを誰も聞いていないのに口に出してしまつた。

元の時代にもどつたい　　岳の頭の中でもう一つ願いが芽生えてきた。

「こつてきまーす」

「こつてらつしゃい」

母はやわしこ声でそう言つた。

自転車を走らせながら母は考えていた。

そして結果的にこんなことを考えていた。

俺はタイムスリップしたんだ・・・と。

そう考へてみるとすぐに中学校についた。

ここのはZ市立中学校だ。

今日は4月3日、始業式だ。  
ここの時代では。

中学校につき、教室の2・3に入るとみんながいた。  
幼い姿でだ。

そのとき一人が近づいてきた。

「よつよつー」

岳は少しこな声でいった。

「よ、よつ・・・」

相手は特徴ある肌の黒さ、そして何より髪型がおかしい。  
そう寺木学である。

「どうやら同じクラスらしい。」

まあ昔の記憶と何一つ変わらないが。

「どうしたあ？元気ねえなあ。まあもともとか  
力チンときた。」

「うつせえよ」

「へこへい」

その返事もムカついた。

がおさえた。

ここでキレると先生や何やらがきて面倒くさい。

特に数学科の先生の赤間秀樹は要注意だつた。

俺の記憶によれば、だ。

やはり、タイムスリップしたんだなあ、と岳は改め  
実感した。

「はい席座れー」

そこに先生が入ってきた。

がらりとドアを開け、がらりとドアを閉めた。

みんな一斉に席に座つた。

「うつそ最悪」

小声が聞こえてきた。

岳自身も最悪だと思っていた。

そつあの数学科の赤間先生だった。

あの地獄の。あの恐ろしい。あのどなり声のすゝめ。

あの赤間先生だった。

「はあ・・・」

わかつてはいたが少し落ち込んだ。

それぐらいに恐ろしい先生なのだ。この人は。

どんなに赤間のどなり声を聞いてもなれるものはないだろ？

その先生のいろいろな話を聞いて1時限目は終わった。

宿題の提出や今後の予定などいろいろ頭が痛くなるほど教えてくれた。

ほとんど頭に入っていないといつのこと。

赤間先生は予測だがきっとA型だろ？

そう考えている時に学が手まねきをして話しかけてきた。

「ちょっと」

いつもなら聞こえないふりをするのだが今回は違った。

真剣な顔をしている。

岳はそつちに向かった。

「何？」

「ここじゃ話しづらい。体育館の裏あたりまで行こう

岳は言つとおりにした。

体育館裏に着いた。

「で何？」

今度は聞けそうだ。

とその前に岳は付け足した。

「なるべくてつとり早く

どんなに真剣でも相手はあのMなのだ。

岳は呼ばれた時から少し嫌だつたのだ。

学は口を開いた。

「あの実は  
岳は驚きの現実を知つた。」

岳は教室に戻った。  
さつきの学の話が脳裏に蘇る。

「実はここは世界少しおかしいんだ」

「は？」

「なぜかよくわからないんだけどみんなに話しかけてもシカトしてくれるんだ。」

岳は少し笑った。

「それはお前がMだからだよ」

学は否定した。

「ちがうんだ。お前には俺が見えているかもしれないけれどみんなにはどうしてもおれが見えてないっぽいんだ。」

学はつづけていった。

「それだけじゃない。声もビリやけりかえてないらしい。……もしかしたらお前も……」

「でも親はおれのことが分かつた。大丈夫だよ。」

そう言つたが内心すこし不安になつてきていた。  
その証拠に手からうつすらと汗が出てきている。

「いやそれは俺もだ。」

「えつ！？」

「うん……」

「じつじやあ夢はどんな夢を見たんだ？」

「なんか最初はインドみたいなところにいた。だけどそこにはいる人みんな腐つていつた。そのあと確かいつの間にか病院にいた。でもそこもおかしいんだ。みんなマネキンにされてつてそのあと目が覚めた。」

「……」

まったく一緒だ。

もしかしたらこいつは安全・・・？

そして岳は学、いや頼りない学を少し信じてみることにした。

「じつはおれもなんだ・・・」

「えつ？」

学は驚いた。

「まじかよ・・・」

「ああまじだ。」

「じゃあ俺達どうなっちゃうんだ・・・」

「・・・」

岳は言えなかつた。

予想は大体ついていた。

いや推理と言つておいたほうがいいだろ？

きっと・・・これも夢なんだ。

しかも学と同じ夢を見ている。

誰がこんな夢を見せているんだ？

そう無性に叫びたかつた。

岳はそれを抑え冷静に言つた。

「とりあえず俺ら以外だれも信じるな。この世界も夢だ。おそらく

「おう！」

「じゃあそろそろ時間だからもうじりつけ」

学がどうして自分と同じ夢を見ているのか岳はわからなかつた。

それとも・・・学も夢の中の仮想の人物なのか？

意味が分からず岳は体育館に行く準備をしていた。

次は始業式だ。

とりあえず準備をするものが思いつかなかつたので筆記用具とメモ帳をポケットに突っ込んだ。

そして岳は体育館にむかつて歩きだした。

かすかな希望を持つて。

## 1-1 (前書き)

いやあー

書き続けていたらいつの間にか1-1まで書いていました。  
最初は5ぐらいで終わるとと思っていたんですが^\_^

体育館についた。

岳はそこに並んでいるイスの一つに座った。

しばらくするとマイクを持った人が現れ前に歩いてきた。

「それではこれから始業式を始めます」

その人は間もなく去り、代わりに老いた男の人が現れた。

校長だ。

あごには白いひげが10センチメートルほどあり右目の横に大きなほくろがある。

校長にみんなは、春休みは楽しかったかと勉強についてさんざん聞かされた。

岳が2番目に嫌いな人だ。

そして30分ぐらいの相当長い校長の独り言がようやく終わり深呼吸をした。

「やつと終わった。」

岳がそうしていると、先ほどのマイクを持った人が再び現れた。

「それではこれで始業式を終わりにします」

その途端、皆は一斉にしゃべりだした。

「やつと終わったよ」

「うんうんめっちゃ長かったもんね」

そういう話が耳に入ってきた。

しかし岳には話し相手が近くには一人もいなかつた。

なぜだろ？・・・誰も話しかけてこない・・・

そういえば朝来た時も学以外話しかけてきた人は一人もいなかつた。

やはり学が言ったとおりなのか・・・

学を探してみる。

が、学の姿はなかつた。

「あれ？・・・」

いくら探しても学の姿が見当たらない。

そういう探しているうちに先生、いや赤間がみんなに指示してきた。

「よし教室にもどるぞ」

その声を聞いた生徒たちは教室へ戻つていぐ。

その生徒たちにつられて他の生徒たちも戻つていぐ。

岳もとりあえずは戻つた。

なぜだろ？ 妙に胸騒ぎがする。

岳はもうあの恐怖を一度と味わいたくなかった。

まさかこれもその恐怖を味わされる夢の一つなのか。

岳は教室につくと必死になつて学の姿を探した。

しかし見当たらない。

それでもあきらめず探す。探しまくる。探して探して探しまくる。

それでも見当たらない。

岳は学の言葉が脳裏に蘇つてきた。

「実はこの世界少しおかしいんだ」

もう一度蘇つてきた。

「ジツハコノセカイスコシオカシインダ」

岳ははつとなつて新しい座席表を見る。

少し遅れてきたので岳は見る必要がなかつた。

なぜなら空いている席は一つしかなかつたからだ。

しかし何か嫌な予感がした岳は確かに座席表をみてみた。

そこには自分の席は

あつた。

岳は少しほほつとして席に戻った。

そこへ先生が入ってきた。

「よし席座れ。給食の時間だ。」

そういうえらいつの間にか腹が空いていた。

学のことで気付かなかつたのだろう。

岳はみんなが給食の支度をしている間時間があるのでトイレに行こうとした。

「おや？ どこに行くのかね？」

岳はびっくりとした。

今のは赤間の声だ。

「キュウショクガーベチャイケナイダロウ？」

・・・？？？

給食？

岳は自分の姿が赤間に見えていたことより給食のこと驚いた。

「きゅ、給食？」

赤間は不気味な笑みをした。

「ソノトオリダ。オマエハワフレノキュウショクダロウ？」

はあ？ 何言ってんだこいつ・・・

赤間の周りにいつの間にか生徒たちが集まってきた。

「どうこうことだよ・・・」

そいつらは不気味な笑みを浮かべた。

「オマエハワレワレノショクリヨウウダ」

「ソウダソウダ」

「・・・」

なにもいえなかつた。

ただ一つだけわかつたことがある。

それは

こいつらが敵だといつことだ。  
しかも全員。

岳は学のことを思い出した。

「じ、じゅあ学はどうしたんだよーー..  
すぐに返事は返ってきた。

「タベタ」

岳は震えあがつた。

恐怖よりも先に憎しみが出てきた。

「けんじゅねえ」

「キコエナイナ」

「ふざけんじゅねえ!!!!」

そいつらは笑つた。笑いまくつていた。

「フザケテナドナイ。カトウセイブツハクワレル、ソレガアタリマ  
エデハナイノカイ?」

下等生物?

その時岳はすべてがわかつた。

学と俺が無視されていたことが。

それはこの世界では俺らは下等生物なのだ。

つまり豚や牛のようなものなのだ。この世界では。

岳の脳内で学が現れこう言った。

「実はこの世界少しおかしいんだ」

学の言つていたことは決して偽りでも何でもなかつた。

真実だつたのだ。

「つく・・・」

岳はこいつら、いやこの人間の形をした化物を憎しみのこもつた眼で睨んだ。

「ククク、ニラマナイデクレナイカナ？モウスグクワレルトイウノ

二

そう化物は言つたが岳には聞こえなかつた。

そしてにやけた。

「死ね」

そう言ひ残し岳は思いつきり赤間の姿をした化物にパンチをくらわした。

その途端にその化物は吹つ飛んだ。

「キサマ・・・」

他の化物の目が一斉に殺意の芽生えた目に変わつた。

しかしそれに構わず岳は暴れる。

それに見かねて一人、いや一体の化物はナイフを持ちこむらに向けた。

「ソッチガシネ」

ブスリ

「ううああああ・・・」

岳は背中に何か刺さつたのを感じた。

それを抜き取る。

とたんに血がじくじくと出てきた。

その痛みにも耐え、岳は化物たちを睨みつけた。

それは右腕だった。

まさか  
・  
・  
・  
。

岳は右腕を見た。

そこにはあの十字架になるよう滲き出でいる黒点が並んでいた。

その痛みは尋常だつた。

「痛い！痛い！痛いいいいいいいいい！」

「…………」と音を立て倒れた。

「イマスグラクニシテアゲル・・・」  
そう言つてナイフで

「ふふふ。異常が出始めたな……」

その時電話が鳴った

「ヨシミ」

「た、  
たいへん  
です！」

「どうした？」

「はー。ひーがひき飛んだといひーなー。  
なーなんたーでーわれは本当かー」

「わかつた。今すぐサンプル01を探し出せ。」

「どうした!!!!!!」

ツーツーツー

しかしきれてしまつた。

「チツ」

その男はすぐに準備をし終えるとあると即ち向かつた。

岳ははつとなり自分が生きていることを確認した。

それを確かめるために目を開けた。身体を横にそらそらとしてみると、しかし身体が動かない。いや動けないので。

「……………」

岳はもかした。やはり動けない。

がせ重がないが、すぐには分かって、  
目を開けたその時からわかつていた。

「なんだよこれ・・・。」

用知識がぐるぐる繰り返してしまった。

窓のようなところから空が見える。暗い夜空だ。

壁を見る。白い。それは、触つてみると吸い込まれそつなくりこ白

三を再びつむつた。

そして目を開けた。何か走る音が聞こえてくる。

すると白い壁の一部が開きある人物が走り寄ってきた。

学はゼえゼえと息を荒らしていた。

そういう学はカードキーのようなものをどこかに差し込んだ。

それと同時に鎌かぼじけた

「アーリー・リード

岳が冷静なのに対し学はかなり焦っていた。

「これはそれじゃないじゃなし。私は逃げてからだ。ついでに」

「わかつた」

どうやら事態はかなり深刻なようだ。

岳は学のあとを追つた。

「これで夢? それとも……? 」

そう考へていらうちに学はいきなり立ち止まり振り返つてきたりのすごい疲れを感じるその婆はボロボロだった。

そして学は深呼吸をして座り込んだ。

「なぜ」「なんだ?」

突然話しだした岳に少し驚いた様子でいたがすぐに元に戻りこう言った。

「……俺にもわからない。だがこれだけはわかる。

卷之三

思わずそう言ってしまった。

「じゃあおまえひとりで助け也要らずに逃げていれた?」「学はためらいもなくすぐでを言った。

「俺は

L

そのじゅうある男は（サンプル01）を探していた。

その男もまたかなり焦っていた。

そのカリタスを羅馬に運んでアグリコラに

「いたかあああああああ……！」

相手はかなり冷静だ。

「いえ、それとサンプル02も脱走しました。今探しています。」

「…・・・・・・・・わかつた。」

男はケータイをきると座り込んでしまつた。

まづい・・・もしサンプル01がサンプル02に真実を話してしまつたら計画は完全に失敗に終わる。それだけは阻止せねば!!  
おそらくサンプル01はもう気づいているだろう・・・  
この世界が ではないことが・・・  
男は立ち上がり再び走り探し出した。  
計画を成功させる、それだけしか男の頭の中にはなかつた。

「俺は

」

学は今までもあったことを話した。

時は昨日の夜の8時少し前。

学は夜道を何の当てもなくふらふらと歩いていた。すると何かの飛ぶ音が聞こえてきた。

「・・・」

何か真上にいるな。

そう思つた学はいきなり逆走しました。何となく嫌な予感がしたからだ。

そして上をそつと見上げる。

上には何かが浮かんでいた。

「なんだあれ・・・」

学の後を追つみつに何かはみりつみりつといひに移動していく。学は今度は全速力で走つた。

直感的には俺を狙つていると思つたからだ。

しかし何か、いやHFOは間が開く毎にかどんどん縮んでいく。そして意味不明な光をあてられた。

ふわり

学はHFOに吸い込まれていった。

吸い込まれている間に意識が少しづつ遠のいていく。

まずい！ 気絶するな！ 気絶するな！ 気絶するな！ 気絶するな！ 気絶するな！

氣絶するな！ 気絶するな！ 気絶するな！ 気絶するな！ 気絶するな！

永遠に心の中でそう呟えていた。

気がつくと学は横になっていた。

声が自分の上のほうからする。誰かがいる。

学は動けたので思いつきり足を上に振り上げた。

足に何かがぶつかった。

そして倒れる音が聞こえてきた。

「き、きさま・・・」

学は眼を開け勢いよく起き上った。

目の前にはさつき学が蹴り上げたらしい男の人が座り込んでいた。右目を押さえている。おそらくさつき蹴った場所が右目だったのだろう。

そこから血がぽたぽたと流れていた。

その男が立ち上がろうとしたその時に学はもつ一度けりをくらわせた。

今度はかかと落とした。

男は避けようとしたが避けきれず肩に直撃した。

「うう・・・」

バタリッ

男の人は倒れこんだ。

「ここはどこだ?」

まったくもってわからなかつた。

とりあえず考へても仕方がないので学は氣絶している男の人のポケットやらなんやらを探つてみた。

見つけたものは3つ。

こここの地図らしきものとカードキー、そして計画書だった。

学はその計画書を一通り見てみた。

そこにはこう書かれていた。

サンプル採取計画書

われわれの超人間作成にはまず人の心臓と脳のサンプルが必要だ。

そのためわれわれは寺木学と山名岳をサンプルとして捕獲する。

寺木学・・・サンプル01

山名岳・・・サンプル02

しかし計画を成功させるには難しそう。

なぜかというと、その心臓や脳を取り出すときにサンプルが暴れてしまえば傷ついてしまい使い物にならないからである。

麻酔を使うと脳と心臓がサンプルとして使えなくなるので麻酔は使つてはいけない。

そのためにホリューヤー氏が開発した（現実夢混亂機）といつものを利用してもサンプルに現実を夢と勘違いさせることによって暴れさせないようにするのである。

責任者：井川純一（日）

第一責任者：ホリューヤー（米）

「・・・なんだこれ。ふざけてんのか・・・」

学の田には一筋の光がさしていた。

と、そのとち警報がなつた。

学は急いで地図を見た。

いたぞー！」

部屋から出ると男の人が駆けこけてきた

「樂」

学は走るのにはかなり自信がある。

「なんだどうってことないじゃないか。」

学せん處せむりへつ船を泊した。

その事がしてくる場所をそつと見てみるとカリタイで男の人が誰か

と話していた。

隠れてその会話を聞いてみる。

「……………サンブルーが逃走しました。……………はい。」

それを聞いて学は反射的にその男の人を思いつきり蹴り飛ばしてい

た

起き上がりなーのを学ば確認するとカリタイを踏みつぶした。

「くそが……」

そつせを捨て、学は西のこの山屋へ向かつた。

あと、ソリを曲がればすぐそこだ。

その角を曲がり学は岳のいる部屋に入った。いつの間にか疲れてきていた。

「といつことなんだ。」

すべてを話しあると学は深呼吸をし、倒れこんだ。

「お、おい大丈夫か？」

「大丈夫だ。少し休ませてくれ。」

「わかった。」

どうやら学は相当疲れているようだ。今まで学の疲れているところをあまり見ていないので、岳は少し驚いた。

1分後。

学は立ち上がった。

「よしもついくぞ」

学が立ち上がると岳も一緒に立ちあがった。

男はにやりと笑いながらケータイで誰かと電話していた。

「仕方がない。プロジェクトAからプロジェクトEに変更だ。」

ケータイをきつた。

「少し手荒だがこれなら確実だろう。そのためにはざとサンプルをわざわざ2体用意したのだ。」

と、その時再びケータイがなつた。

「なんだ？」

相手が静かな口調で言った。

「見つけました。サンプル0-1とサンプル0-2はともに行動しているようです。まだこちらに気づいていません。どうしますか？」

男は少し間を開けていつ言った。

「サンプル0-1の。。。お前の腕ならできるはずだ」

「わかりました。」

そして、ケータイをきつた。

この世界が夢ではないことがサンプルにばれるのはまずい。

だが普

ロジェクトEなら大丈夫だな。ふふふふ・・・

そして男はサンプル採取室に向かつた。

男は拳銃を手に持つた。

さつきあの人人が言つていていたことが脳裏に蘇る。

（サンプル①の心臓を狙つて拳銃で撃て。お前の腕ならできるはずだ）

男はすぐ近くにいるがまったく気づいていないものにさつと拳銃を向ける。

心臓めがけて・・・

「よしもつこくぞ」

岳は学が立ち上がるのを見ると一緒に立ちあがつた。

どうやら学の疲れはもうないらしい。

やはり学は、運動神経だけはかなりいい。

ただMといふことだけが残念だ。

学のMといふことを抜けばあとは完ぺきなのに・・・

そう思いながら学の横に移動して走つた。

バンッ  
ドサッ

銃声と同時に倒れた音がした。

倒れたのは学だ。胸のあたりが真っ赤に染まつてている。

「うう・・・・げほっげほっ！・・・」

岳は周囲に警戒しながら、しゃがんだ。

「お、おい！学！大丈夫か？」

それに学は弱弱しく答える。

「も・・・う・・・・だめ・・・だ・・」

「ダメじゃねえ！..がんばれ！死ぬなよ！..」

そういうながら岳はなにか手当でできそうなものを探した。  
しかし見つからない。

なぜなら、周りには何もないのだ。

必死にあたりを見渡す岳を見ながら学は

「た・・かし・・・・」、これ・・を・・・・

その声に反応し、岳は学に視線を向いた。

岳が二つを向いたのを確認すると学ば

り出した。

それは地図とカードキーと計画書だった。

「あと・・・・・は・・・ま・か・・・せ・・・・・・・た・

•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•  
•

岳はそれを何も言わずに受け取った。

• • • • • • • •

学はゆっくりと笑みを浮かべると田を静かに閉じた。

なぜだらう・・・もう死ぬのに全く悲しくもなんともない・・・

そして学はそれを思つたら最後に、意識がなくなつた。

岳は学からもらつたものをして読み終えていた。

とたんに、岳は殺意のこもった目になっていた。

「やるせねえ・・・・・」

学を殺しやがつたやつを殺す。

いやここをぶつ壊す。

「ここにいるもののすべてを消す。」

とその時、後ろから声がした。

「お母ちゃん、サンプル01が殺されて憎いかい？サンプル02

111

おシフルローとは私がひいてのじだね。

そしてサンプル02は俺  
・  
・  
・

「なにをそんなに黙り込んで」

「……殺しておる」

・・・・・殺してやる

「はあ？」

卷之三

「な……」

岳は言葉を失つてしまつた。

「…そんなにおどけ~~いた~~したのかし?」

目の前にいるのは男が2人だ。

片方はどうでもいい人

「井三屯」

そう目の前にいる人のうちの二

その時、すべてが一なかた。

卷之二

岳は店長、いや井川を睨みつけながら話した。

おおえは俺が一人で生き残るに来ぬ前に誰かと話してい

「ああ。

「その時俺は聞いていたんだ。そのお前とホリコヤーの会話を…！」

井川の脣がひくりと動いた。

「ああその通りだ。サンプル02」

おぞらくその時に8時に俺をおもう」とか決まつた。それと学セ・

卷之二十一

• • • •

岳が黙り込むと井川が岳に「つづつた。

「つづけたまえ」

少しの間の後、岳はつづけた。

「あのUFFOみたいなものはアメリカでつくられたものだな？」  
ぴくり

また井川のまゆが動いた。

「証拠は？」

「あの計画書をみたらホリュヤーはアメリカ人らしいな。ホリュヤーは夢現実混乱機というよくわからないものを作れるくらいだ。こうこう乗り物ぐらい簡単だらう？それとアメリカで極秘で作つているとテレビでも見たことがある。それで」

「君の推理は見事だ。もつといい聞き飽きた」

岳の殺氣溢れた視線を井川は全く気にせずに隣にいた男にある命令

をした。

「」じつの脳を狙つて打ち殺せ」

岳は半ばにやりとあざ笑つた。

「ばかなこというぜ。計画書を書いたのはお前だらう？」で俺を殺してしまえばサンプルは手に入らなくなる。」

「ばかは君のほうだよ。サンプル〇2」

「なんだと・・・」

「君はまだ知らない」とがあつたんだよ。」

井川はつづけた。

「その計画書がプロジェクトEではなく、プロジェクトAを記してあることを」

「プロジェクトE？」

岳は真剣な顔に戻る。

「そうだ。ふふふ・・しかたがない。君はどつせサンプルになるからな。特別に教えてやるわ。この計画はそもそも心臓と脳が手に入ればいいのだ。それとサンプルは2体いる。ということは片方は心

臓だけ、片方は脳だけ完全な状態で手に入ればいいのだ。

・・・  
ふ

ふふ。もうわかつたな。」

岳に殺意よりも恐怖が芽生え始めた。

無意識的に岳は、後ずさりをしていた。

コン

頭になにかが当たられた。

振り向く。岳は震えだした。

「そこまでだよ」

井川がそっと歩み寄る。

もう後ずさりはできない。

さっきから頭に当たられているのは銃口だからだ。

もう俺は死ぬのか？

そうおもっていると口が勝手に動いた。

「おれは・・・」

「ん？」

「おれは、死んでもあんたらを許さない！……！」

「遺言かい？」

岳は少し間を開けて言った。

「ああ！！！」

井川はそれを聞くと表情が一変した。

「うて」

それは低い声だった。

バンッ

井川は岳の死体を見下ろしていた。

「無様だ・・・」

岳の頭は血まみれになつており、脳みそが少し飛び出していた。

「斎藤、見事だ。」

井川は銃で岳を撃つた男にそう言つた。

「ま、こんなもん金さえあれば楽勝だよ。」

「やうか・・よしこ」これらの脳と心臓を取り出して、保管しろ」  
そう井川が命令すると斎藤、斎藤龍は元岳がいた部屋に一人を持つて行き、ポケットからナイフを取り出した。

「まずはお前からだサンプル02」

ナイフをサンプル02の胸に当て、勢いよく切りこんだ。

ぶしゅ

血が飛び散る。

そして、そこから心臓を取り出した。

動脈や静脈を切り落とし、液体の入っているビンの中に入れた。

「次はお前だ。サンプル01」

斎藤は今度はチエンソーを取り出した。

それに電源を入れる。

それと同時に刃が回りだした。

「終わりだ。」

斎藤はそれを頭に当てやつとした。

しかしその時、けりが自分の手に当たった。

チエンソーを落としてしまった。

「いつ！？」

そのけりは、サンプル01のものだった。

「斎藤、おまえにおれはころせない」

？？？？？

生きている。

どうなつているんだ？

「き、貴様！－なぜ生きている。」

「残念だつたな。俺は元から死んじゃいねえよ」

「な・・・

「本当のことを話してやろうか？」

そう言いながらサンプル01、いや学はチエンソーを拾い上げる。

「こ」の血を見てみる。」

つづける。

「これは・・・トマトジュースだ。それもかなり濃縮されたね。」

「！」

斎藤は何も言えなかつた。

「それにおれは実は防弾チョッキを着てゐるんだ。気付かなかつたかな？」

「どういふことだ・・・」

学は不気味に微笑む。

「まだ分からぬのかい？僕は今までずっと苦悶をしていたんだよ。」

「・・・」

「そしてサンプル01は僕ではない。」

「そういうつくりと確實に近づいてくる。」

斎藤は動けない。

「サンプル01はきみだよ。斎藤君」

「・・・うそだ」

「嘘じやないよ？君はずつと利用されていたんだ。それとね・・・」

学の顔が真剣になる。

「よくも岳を殺してくれたね・・・」

「・・・」

チエンソーが頭に向けられた。

「僕はもう許さないよ。いや許せない！――」

「助けて！――しにたくねえよお・・・」

「もうおやい」

学は斎藤、サンプル01の頭をチエンソーで切り裂いた。

そこから丁重に脳を取り出し、液体の入つたビンの中に入れた。

ドアが開き、井川が入ってきた。

「プロジェクトEは成功だよ」

「・・・いや失敗だ」

「何?」

井川は眉間にしわを寄せた。

「岳がしんだ」

「・・・仕方がないことだ。まさかサンプル〇2が撃つとは思わなかつたからね」

そこへ、また誰かが入ってきた。明らかに、外人だ。

「オシバイジヨーズダツタヨ」

そこに入ってきたのは、ホリューヤーだった。

ホリューヤーは拍手をしながら、歩み寄ってきた。

学が落ち込んでいるのを見ると、ホリューヤーはこう言った。

「ダイジョーブダ。タカシノ、ノウノコピーハトツテアル」

学の目が大きく開いた。

「ほ、本当か!?」

「アアホントウダトモ。コレテコピー二ングンラツクレバハイ」

「ははは・・・よかつたな、我が息子よ」

「ふう・・・よかつたよ・・・」

「キミハホントウニユウシユーダヨ。Mr.マナブイカワ。」

寺木学、いや本当の名は井川学だ。

今まで、ずっと寺木だと名乗っていたが、本当は井川であり、井川純一の

息子である。

岳やみんなには悪いと思っていたが、今までずっと嘘をついてきたのだ。

まあ仕方がなかつたのだが。

学は胸が高鳴つた。

「で、いつコピーしたんだ?」

「ユメカラミセテイルトキダツ。」

「そりゃ。確かにコピーできるな。」

しばらくやうじつ話が続き、学は血に染まつてこむ手を水で洗い流しにいった。

「これで・・・やつとすべてがおわつた。」

すると、隣にいた純一が首を振つた。

「まだだ。まだミニコータントを作つていない。」

「あ、そつか。そついえば、ミニコータントって何体作るの?」

「サンプルの2と山崎の2体だ。」

「どのぐらいで、できる?」

「3年ぐらいだらう」

「3ねんかあ~。・・・長いな」

「はははは、2体作るにはだよ。1体作るには半分の1年6か月だ。」

「でもながいよ」

「がまんしろ」

「・・・ちえ」

学は聞こえないような小さな舌打ちをして、1年6か月後を想像していた。

続  
<

## ヘルローゲ（後書き）

この話には続きがあります。  
タイトルは「ミュータントベイビー」です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4397g/>

---

ユー・エフ・オー UFO

2010年12月4日05時47分発行